

樋口一葉の小説の文体について

二 羽 理 香

一 序（省略）

二 本 論

一章 作品の分類（省略）

二章 作品の統計的観察

一節 「文体研究」について（省略）

二節 一葉の「文」について（省略）

三節 品詞の比率について

文体を分析する場合に、文がどのような性質の単語から構成されているかに注目する方法がある。今回はその方法として品詞分析をおこなった。

品詞の分類については、主として学校文法に従い、『学研国語大辞典』（学習研究社）を参考にして自立語のみを分類することにした。自立語は、①名詞②動詞③形容詞④形容動詞⑤副詞⑥連体詞⑦接統詞⑧感動詞である。文の意味の構成の材料となるのは自立語であることから自立語だ

けを考え、付属語（助詞、助動詞）は考えないことにした。ここで、一葉の文体は雅俗折衷体といわれるものであることに注意する必要がある。

雅俗折衷文とは「地の文は文語文（雅文）で書き、会話は口語文（俗文）で書く文体」（『大辞林』三省堂）であり、そこで品詞の取扱いで迷うものがあつた。連体詞がそうである。例えば「この」「わが」などは口語では連体詞であるが、文語では代名詞十助詞「の」「が」である。従って一葉の作品を分析するにあたってはこのような語は地の文では文語の取扱い（代名詞十助詞）をし、会話文では口語の取扱い（連体詞）をして分類した。

つぎの表は一葉の二十作品を分析した結果である。

この結果をもとに品詞の働きから考えて、次の四つの組に分けることにした。分け方については樺島忠夫氏と寿岳章子氏の『文体の科学』（綜芸舎）を参考にした。

第2表 品詞の比率 (%)

	作品	名詞	動詞	形容詞	形容動詞	副詞	連体詞	接統詞	感動詞
1	闇櫻	48.4	31.2	8.3	2.4	6.5	0.8	0.7	1.6
2	別れ霜	54.4	28.4	5.9	2.4	6.8	0.7	0.7	0.7
3	たま禰	54.7	27.9	7.6	1.8	5.0	0.9	1.5	0.6
4	経つくえ	54.3	26.8	6.6	2.5	7.2	1.2	0.9	0.4
5	うもれ木	59.1	25.4	5.7	2.8	4.9	0.9	0.7	0.5
6	曉月夜	53.9	27.1	7.4	2.6	6.5	1.3	0.9	0.4
7	雪の日	57.3	28.4	7.7	0.7	4.7	0.5	0.4	0.3
8	琴の音	57.2	27.1	8.2	1.5	4.9	0.4	0.4	0.2
9	花ごもり	54.5	26.9	8.4	2.7	5.3	1.0	0.6	0.6
10	やみ夜	54.2	27.8	7.0	2.4	6.3	1.1	0.8	0.6
11	大つごもり	57.2	27.0	6.7	1.7	5.0	0.9	0.4	1.0
12	軒もる月	55.3	29.4	8.2	1.0	3.8	0.7	0.9	0.8
13	ゆく雲	55.5	27.8	6.6	3.7	5.2	0.5	0.5	0.2
14	うつせみ	47.0	33.6	6.5	2.9	7.1	0.8	0.2	1.8
15	にぎりえ	46.5	35.1	5.8	2.8	6.6	1.3	0.4	1.3
16	十三夜	47.1	33.8	5.3	2.8	8.2	1.0	0.4	1.4
17	この子	47.3	32.2	8.2	4.4	6.9	0.4	0.6	0.4
18	わかれ道	48.5	33.1	6.3	3.1	6.7	1.0	0.6	0.6
19	裏紫	49.1	31.4	6.6	2.0	7.6	1.8	0.3	1.3
20	われから	52.1	30.1	6.7	1.9	7.0	1.2	0.4	0.7

第3表 品詞比率 (%)

	作品	N	V	M	I
1	闇櫻	48.4	31.2	18.0	2.3
2	別れ霜	54.4	28.4	15.8	1.4
3	たま禰	54.7	27.9	15.3	2.1
4	経つくえ	54.3	26.8	17.5	1.3
5	うもれ木	59.1	25.4	14.3	1.2
6	曉月夜	53.9	27.1	17.8	1.3
7	雪の日	57.3	28.4	13.6	0.7
8	琴の音	57.2	27.1	15.0	0.6
9	花ごもり	54.5	26.9	17.4	1.2
10	やみ夜	54.2	27.8	16.8	1.4
11	大つごもり	57.2	27.0	14.3	1.4
12	軒もる月	55.3	29.4	13.7	1.7
13	ゆく雲	55.5	27.8	16.0	0.7
14	うつせみ	47.0	33.6	17.3	2.0
15	にぎりえ	46.5	35.1	16.5	1.7
16	十三夜	47.1	33.8	17.3	1.8
17	この子	47.3	32.2	19.6	1.0
18	わかれ道	48.5	33.1	17.1	1.2
19	裏紫	49.1	31.4	18.0	1.6
20	われから	52.1	30.1	16.8	1.1

* (注)・N……名詞の組・V……動詞の組・M……形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の組・I……感動詞・接統詞の組

一、名詞の組 (N)

名詞は文の中で文の骨組みとなり、また具体的なイメージや感情を引き起こす力を比較的多く持つ語である。

二、動詞の組 (V)

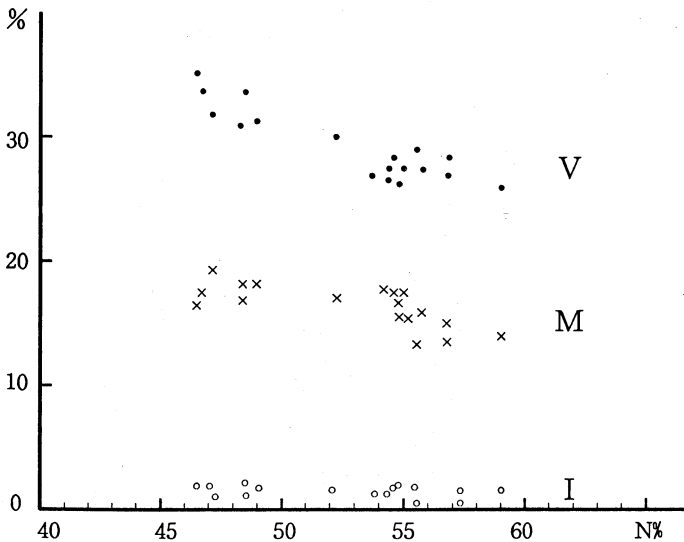
動詞は動きや存在を表わし、文法的には、文の中で成分をまとめてしめくくる重要な働きをなす語である。

三、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の組 (M)

これらは文の中で主として修飾の働きをなし、「どんな・どんなに」を表わし、また述語になって「どんなだ」を表わすことができる語もある。

四、感動詞・接続詞の組 (I)

以上四つの品詞の組がどのような比率で含まれているかを観察すると次の図のようになる。図は名詞Nの比率を横軸にとり、N%をもつ作品が他の三つの品詞の組を何%持つかを縦軸にとって示している。



第1図 名詞Nの比率とV・M・Iの比率の関係

この図からわかることは、感動詞・接続詞の組 (I) の比率は、名詞比率Nの大小にもかかわらず大して差がないということである。そのことは、感動詞・接続詞が文章の長短や表現のあり方により左右されずに一定の割合で含まれていることを示していると考えられる。

そこで、文章の表現性に関係しているのはNの比率に対するMとVの比率であると考えられる。

この図からは、Nの比率が大きくなるとVとMの比率は小さくなり、Nの比率が小さくなるとVとMの比率は大きくなっていることがわかる。

ここでVとMを何らかの式にあてはめ、VとMを一つの数値にしてNとの関係を考えてみたいと思う。

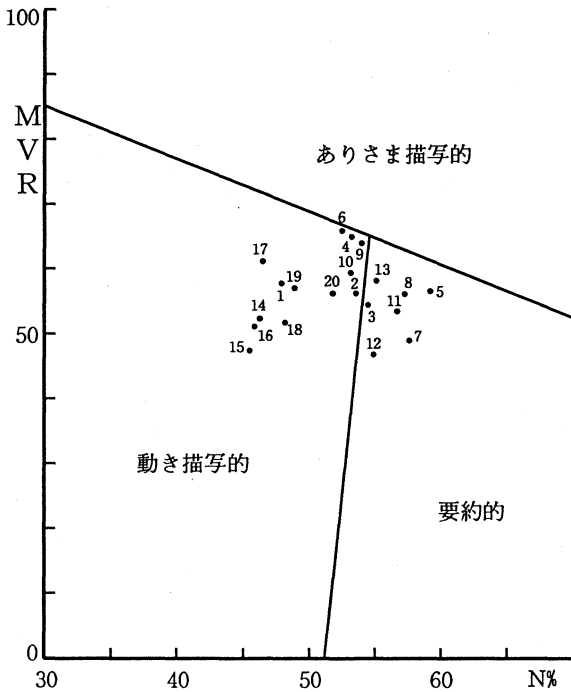
その数値 (MVRと呼ぶ) は『文体の科学』にある式にあてはめて出すことにした。

そこでMVRについてであるが、それは、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の組の比率Mに百をかけたものを動詞の比率Vでわった値をいう。すなわち、

$$MVR = 100M \div V$$

である。

このMVRと名詞比率Nとの二つの組み合わせのあり方がどのように文章の表現性に関係しているかを、次の図から考えてみる。



第2図 NとMVRの組み合わせ

第4表 一葉の作品のN比率とMVR

作品	N%	MVR	作品	N%	MVR
1 闇櫻	48.4	57.6	11 大つごもり	57.2	53.1
2 別れ霜	54.7	55.5	× たけくらべ	……	……
3 たま櫛	54.7	54.8	12 軒もる月	55.3	46.3
× 五月雨	……	……	13 ゆく雲	55.5	57.6
4 経つくえ	54.3	65.2	14 うつせみ	47.0	51.5
5 うもれ木	59.1	56.4	15 にごりえ	46.5	47.2
6 暁月夜	53.9	65.5	16 十三夜	47.1	51.2
7 雪の日	57.3	47.8	17 この子	47.3	60.8
8 琴の音	57.2	55.6	18 わかれ道	48.5	51.6
9 花ごもり	54.5	64.8	19 裏紫	49.1	57.1
10 やみ夜	54.2	59.8	20 われから	52.1	55.5

* (注)

- ・『五月雨』と『たけくらべ』の分析はしなかった。
- ・1『闇櫻』～7『雪の日』: 初期作品
- ・8『琴の音』～9『花ごもり』: 過渡期作品
- ・10『やみ夜』～20『われから』: 大成期作品

図は横軸に名詞比率Nをとり、名詞比率N%を持つ作品のMVRがどこに位置するかを縦軸にとった。
また、図に引いている境界線は『文体の科学』を参考にした。
NとMVRについて樺島氏は『文体の科学』に次のように述べておられる。
・Nが大きく、MVRが小さい文章には要約的(骨組みを述べる)な文章が多い。

・Nが小さく、MVRが大きい文章にはありさま描写的(質・様子を述べる)な文章が多い。
・Nが小さく、MVRが小さい文章には動き描写的(行動・変化を述べる)な文章が多い。
以上のことより、分析した一葉の二十の作品は要約的な文章と動き描写的な文章に分かれることがわかった。ありさま描写的な文章の範囲にはつきり属すものはないが、境界線あたり三作品が位置している。また、分散が見られず、要

約的・ありさま描写的・動き描写的を区切っている境界線のまわりに集まっていることがわかる。このことは、一葉の描写の仕方に極端なものではなく、大まかに言えば似たような描写の作品が多いのではないかと考えられる。また、図より大成期作品ほど動き描写的な傾向が強くなっていることがわかる。

さて、これらの結果は、作品を統計的に分析し、作品一つ一つのおおまかな傾向を導いたものである。従って、一つの作品が初めから終りまで、例えば要約的な文章であるわけではなく、ある部分では要約的であったり、ありさま描写的であったり、また、動き描写的であったりといろいろな部分が複数集まって構成されていることを忘れてはならない。

ここで一葉の作品の中から要約的・ありさま描写的・動き描写的な文章をあげておく。

① 要約的な文章

「我が故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井の家は土地に聞えし名家にて、身は其一つぶもの成りしも、不幸は父母はやく亡せて、他家に嫁ぎし伯母の是れも良人を失なひたるが、立歸りて我をば生したて給ひきに、さりながら三歳といふより手しほに懸け給へば、」

② ありさま描写的な文章

「但しは此人の身に添ひし果報か、銀の平打一つに鶉色ぶさの根掛むすびしを、優にうつくしく似合ひ給へりと見れば、束髪さしの花一輪も中々に愛らしく、此處一つに美人の價値定まるといふ天然の衣襟つき、襦袢の襟の紫なる時は顔色こと更に白くみえ、態と質素なる黒ちりめんに赤糸のこぼれ梅など品一層も二層もよし、」

（『暁月夜』）

③ 動き描写的な文章

「十二月三十日の夜、吉は坂上の得意場へ詠への日限の後れしを詫びに行きて、歸りは懐手の急ぎ足、草履下駄の先にかゝる物は面白づくに蹴かへして、ころ／＼と轉げると右に左に追ひかけては大溝の中へ蹴落して一人から／＼の高笑ひ、聞く者なくて天上のお月さまも皓々と照し給ふを寒いと言ふ事知らぬ身なれば只こゝちよく爽にて、歸りは例の窓を敲いてと目算しながら横町を曲れば、」

（『わかれ道』下）

ここにあげた文章をみると、①の要約的な文章は名詞が多く、項目を羅列してそれを継ぎ合わせたような堅い

イメージがし、②のありさま描写的な文章は視覚的印象に訴えるような語が多く、読みながら構成を要求する感じがし、③の動き描写的な文章は「ころこ」と「からからの」のような感覚的な語が多いとわかる。

また、ここで例としてあげなかったが、動きについての描写には、会話や人の言葉の引用が多く取り入れられている。これは、大衆小説に多く当てはまるのではないかと思う。先程も触れたが、一葉の作品で大成期の作品ほど動き描写的な傾向になるのは、会話や心理描写が文中に多くなり文章に活力が感じられるようになったからだと考えられる。そして、その傾向が強まるにつれて大衆に多く受け入れられ、支持される作品として成熟していったのではないかと思う。

四節 五項目の分析とパターンについて

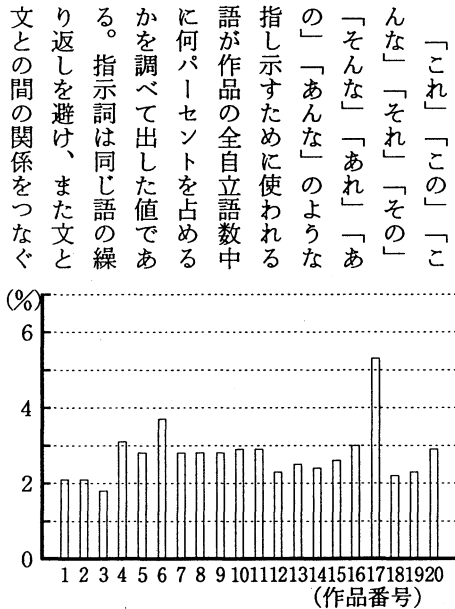
さて、これまでは品詞の比率から一葉の作品の文体把握を考えてきたが、次は、①指示詞の比率②色彩語の比率③表情語の比率④接続詞を持つ文の比率⑤引用文の比率を分析して文体を把握することにした。

以上の分析する項目については主に『文体の科学』を参考にした。

第5表

作品番号	作品名
1	闇櫻
2	別れ霜
3	たまづ
4	経つくえ
5	うもれ木
6	曉月夜
7	雪の日
8	琴の音
9	花ごもり
10	やみ夜
11	大つごもり
12	軒もる月
13	ゆく雲
14	うつせみ
15	にごりえ
16	十三夜
17	この子
18	わかれ道
19	裏紫
20	われから

① 指示詞の比率(%)



①指示詞の比率

に何パーセントを占めるかを調べて出した値である。指示詞は同じ語の繰り返し返しを避け、また文と文との間の関係をつなぐ働きをする。

調査した二十作品中の指示詞上位五つをあげると「この(此)」「それ(夫れ、某れ)」「その(其)」「これ(是れ)」「ここ(此處)」であった。

ここで指示詞の比率が最も大きかった作品『この子』の文章を一部あげてみる。

「…(略)…私の此子は言はゞ私の為の守り神で、此様な可愛い笑顔をして、無心な遊びをして居ますけれど、此無心の笑顔が私に教へて呉れました事の大層なは、残りなく口には言ひ盡くされませぬ、學校で讀みました書物、教師から言ひ聞かして呉れました種々の事は、夫れはたしかに私の身の為にも成り、事ある毎に思ひ出しては彼あで有った、斯うで有ったと一々願られますけれど、此子の笑顔のやうに直接に、…(略)…」(ルビは指示詞のみに付けた)

右のように指示詞が多く使われる文章は文脈への依存度が大きくなっていることが分かる。

また、『文体の科学』にある統計的特性値の大きさを評価する五段階尺度に当てはめてみると、『この子』の指示詞の比率は「大」で、そのほかの作品は「普通」または「小」という結果が出た。そして、グラフから作品番号17(『この子』)が一つ大きく突き出ているのは大体同じくらいであることから、指示詞の使用度数は全作品を通して平均していると見える。

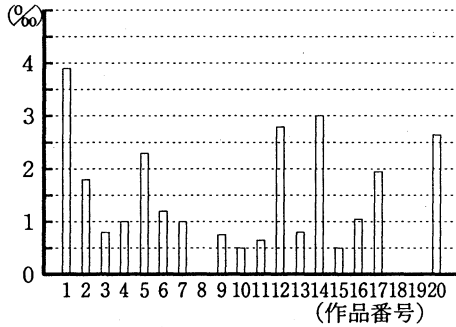
評語 出現率	極めて小	小	普通	大	極めて大
	10%以下	30%以下		30%以下	10%以下
名詞%	45	48	54	56	
M V R	34	41	55	65	
指示詞%	2.1	2.8	5.0	6.0	
字音語%	13	16	26	31	
文長	7	9	14	18	
引用文%	1	8	30	70	
接続詞をもつ文%	3	7	21	27	
現在止%	3	13	47	76	
表情語%	0.4	3.5	13.5	24.5	
色彩語%	/	1.0	7.5	17.0	

第6表 統計的特性値の大きさを評価する五段階尺度

② 色彩語の比率(%)

色彩を表わす語がどのような比率(パーミル)で含まれているかを調べた。

$$\text{色彩語の比率(\%)} = \frac{\text{色彩語の数} \times 1,000}{\text{全語数}}$$



②色彩語の比率

で計算する。
色彩語として抽出したのは「赤い」等の形容詞、「赤く」等の形容詞の連用形、「赤む」等の動詞、「赤色の」「赤の」等の助詞「の」や「色の」を伴った語である。次の表は、二十作品中の色彩とその

第7表 二十作品中の色彩とその対象

合計	色彩								対象		
	薄墨	銀	金	黒	白	紫	緑	青		黄	赤
37				9	8			7		13	顔
7					1	3			1	2	着物
5			1			1				3	着物以外 で身につけるもの
4				2			2				髪
8	1			2	2		2	1			景色
11				1	6	1		1		2	身体に 関する 事柄
14		2	3	2	1			3		3	他
86	1	2	4	16	18	5	4	12	1	23	合計

色が向けられている対象、及び色彩の分配についてまとめたいものである。対象は「顔」「着物」「着物以外で身につけるもの」「髪」「景色」「身体に関する事柄」「その他」の七項目に分けることにした。

「着物以外で身につけるもの」には髪飾り、ハンケチ、指輪、鼻緒など普段身につけているものとし、「身体に関

する事柄」には「紅めの涙」「白き手」「純白の拳」「黒き歯」等のようなものを分類した。

第8表 二十作品の色彩分配

合計	紫		緑		青		黄		赤			
	薄藤色	紫藤色	翠色	緑色	蒼白(青白)	青	浅黄	黄	朱	薄くれなゐ	桜色	紅赤
5	2	3	1	3	3	9	1	1	1	1	8	12
5			4		12		1				23	
合計	薄墨色	銀	金	黒	白							
	薄墨色	白金	銀	金色	黒	純白	雪白					
	1	1	1	3	1	15	1	1	16			
86	1	2	4	16	18							

さて、表から「赤」が最も多く、続いて「白」「黒」「青」の順であった。そして色彩語が一番多く使われ

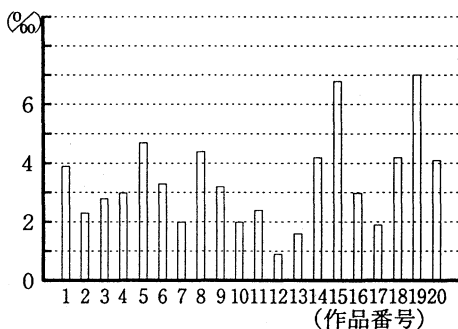
第9表 一葉の作品の行数と色彩語

作品	全文行数	色彩語数	作品	全文行数	色彩語数
闇櫻	112	2	大つごもり	253	2
別れ霜	569	12	たけくらべ	750	23
たま禪	201	2	軒もる月	95	3
五月雨	263	6	ゆく雲	240	2
経つくえ	184	2	うつせみ	215	7
うもれ木	477	13	にごりえ	523	2
暁月夜	368	5	十三夜	326	4
雪の日	87	1	この子	161	3
琴の音	83	0	わかれ道	176	0
花ごもり	346	3	裏紫	66	0
やみ夜	515	3	われから	597	17

ているのは「顔」についてであった。このことから一葉は人間の顔の表情を描く時に最も意識して色彩語を使っていたと考えられる。

また、「五段階尺度」に当てはめると色彩語の比率は「小」または「普通」に属するとわかる。

そして、グラフを見ると作品によってかなりのばらつきがあることがわかる。そこで一葉の色彩語の使用については『たけくらべ』のみ後で更に詳しく分析した。



③ 表情語の比率

③ 表情語の比率(%)
 擬声・擬態語のうち、発生的には擬声・擬態語であっても、使用とともにその意識が薄れたもの(ちよっと、すっかり、など)を除いたもの。これに、発生的には擬声語ではなさそうであってもその意識を伴っているものを表情語と呼ぶことにしてその比率(パーミル)を調べた。

「五段階尺度」から「普通」または「小」に属すが、グラフの後半の幾つかの突出は「動き描写的な文章」に関係していると考えられる。「動き描写的な文章」とは前述のように擬声語や擬態語、比喩、用言を装飾する副詞などを多く含んでいる文章である。それらの表情語が多く使われると文章が生き生きとしてくる。そこで一葉が二十作品の中で使っている表情語を次に示してみる。

それらを眺めてみると、特に珍しい語は見られないようである。また、一葉が特に好んで使っていた表情語と思われるものもなかった。

〈表情語〉

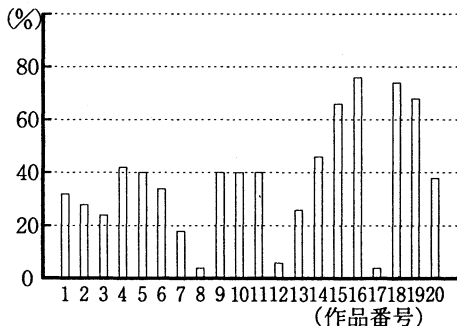
とかいやとど・つとすばとととがのとと・かつたくるわ
 からががりくとさし・すよらんぼなりりうとふほほやゆ・
 うかい・ろ・ろ・と・そちつと・さきゆら・たも・と
 か・がとぎとごとととよ・ののっひふととは・にっ
 うり・そ・やろりりずっそととよ・はうらりほ・のるわ
 ・(口)ことにごぼぼ・り・りくんなど・ゆふら・ろやゆ・
 ちコてさツく・んりらとちづとよととひ・ぶとほもると
 うラきかキヤとさよるすツりくんぬら・とろろやゆう
 ぢ力起・にろ・しす・ソちつと・ばとやとほほも・ろ
 う・(ととぐこと・に・ととららひるろ・とろ
 ・ととりり・ろくしたととろくばひやぶほととらろ
 ろりはらきとさしつすさちツりとぬ・らひる・つりゆ
 うたがざりる・くしたくら・ぶろくとひ・ぶりうくらと
 ろが・りきくととしつすそちととぬタ・とろほむゆう
 う・とら・るとら・し・そ・ろで・ハとりとほ・ととと
 ・ろたがとくこさと・とのよ・とや・たたりとほ・ととと
 とおが・ら・とららとつとりちとりふとひびふりのづるう
 らろたときとささかすよちろかきやら・うろほむゆ
 うおがららつ・らつ・そりよづつにはととふぼの・るり
 ら・かきわとりざしと・ちちかど・らツリ・ほとゆ・
 うととら・くら・くとと・づ・とはばやとと・ヤ・と
 ・ろんかと・けさのとつばとと・とこ・いすりとしとろ
 とぼら・ろとろ・ばりすずちんとりつととひふたりとさよ
 そおがとこりけとさじ・ば・なけよにッた・すつろやもろ
 いろ・りらす・んばりとずりこつん・ハばとふべほしきよ
 そぼたかかくとささじり・らよけどと・たひらとろ・りむや
 いおしが・りしん・ぼとちちつとことばひらとろ・りむや
 ・ら・とすくこととつん・とにた・ふたほとすう
 ととがとんくし・つすずとととかこはととらへ・らやゆ
 りつらんら・くとさじ・んよらかつにたちかぶたとむすう
 あうがかか・と・り・とすたはつど・はばびと・へんらやゆ
 りつ・か・とともとら・よらか・と・ちかびと・ぼむ・く
 あうの・やきどんつとすばたちつとがりばびつか・ととわ
 ・らとが・くこさしらす・ぼなさ・ふふととやりく

④ 接続詞を持つ文の比率(%)

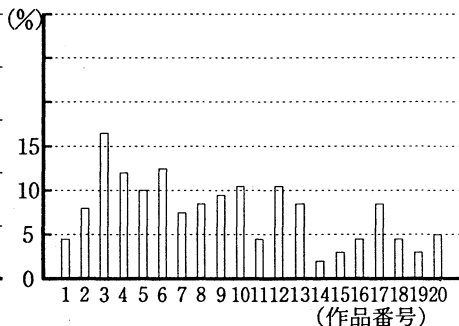
接続詞を含む文が、全体の文の中で占める比率を求めた。調査した結果、「さりととは」「さても」「さりながら」「さりとて」「されば」が多かった。使用度は「普通」または「小」であった。

⑤ 引用文の比率(%)

作品中に会話の引用がどれくらい含まれているかである。一葉の作品を見てみると会話文を「カッコ」などで囲んで表記していない。そこで、個人の判断によるものであるため見落としや勘違いも有るかもしれないが、作品を読んでみて会話文だと考えられる文をカッ



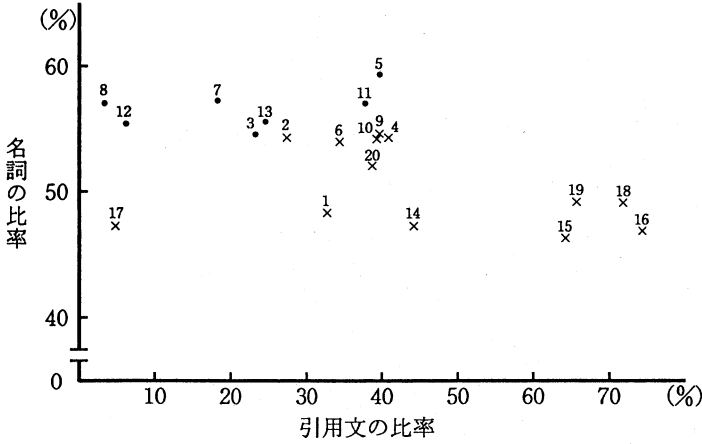
⑤引用文の比率



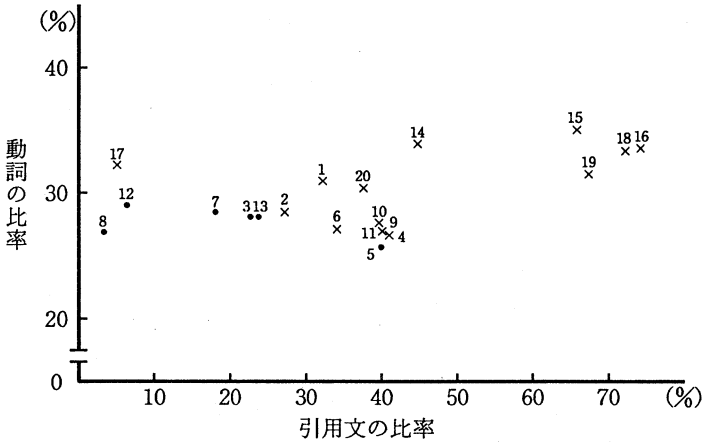
④接続詞を持つ文の比率

ここで囲んで引用文とした。比率は次の式に当てはめて計算した。

$$\text{引用文比率(\%)} = \frac{\text{引用文中の自立語数} \times 1,000}{\text{全自立語数}}$$



①引用文の比率と名詞の比率



②引用文の比率と動詞の比率

これは樺島氏と計算方法が異なるため「五段階尺度」にあてはめることはできない。

グラフを見ると後半の作品ほど引用文の比率が大きくなっている事がわかる。この事は前述の「動き描写的な文章」と大いに関連してくる。

ここで引用文の比率と①名

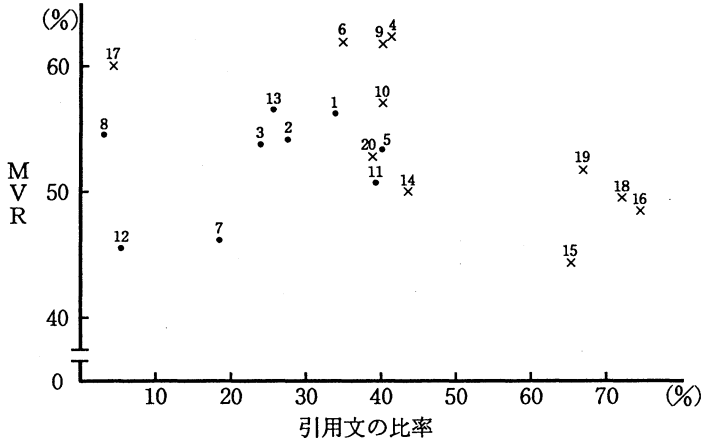
詞の比率②動詞の比率③MVR④表情語の比率の四つの項目が「動き描写的な文章」とどう関わっているか、その関係をみるために図にあらわしてみることにする。図中の×印が「動き描写的」な作品である。これは三節の第2図による。

「動き描写的な文章」は名詞の比率が小さく、MVRが小さい(動詞の比率が大きい)文章である。また、会話や人の言葉の引用を多く取り入れまた表情語の使用も多い文章である。

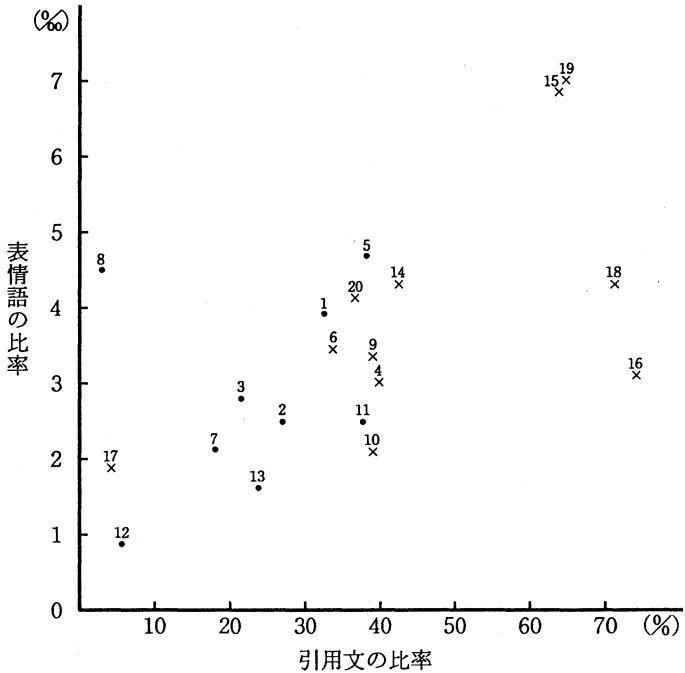
思う。

この図から例外もあるが引用文の比率が大きいものほど「動き描写的」な傾向になっていることが裏付けられたと

さて、以上の項目について分析した結果が次の表である。次に、この表をもとにして作品ごとのパターンを図に示して考えてみることにした。



③引用文の比率とMVR

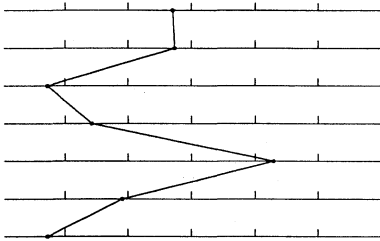


④引用文の比率と表情語の比率

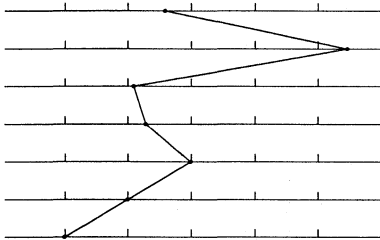
第10表

	作品	指示詞 (%)	色彩語 (%)	表情語 (%)	接続詞を持つ文 (%)	引用文の単語数 (%)	MVR	句点の数	引用文の数
1	闇櫻	2.1	3.9	3.9	4.6	33.0	56.1	192	69
2	別れ霜	2.1	1.8	2.5	7.8	27.6	54.0	601	118
3	たま櫛	1.8	0.8	2.8	16.8	23.5	53.6	220	37
4	経つくえ	3.1	1.0	3.0	12.1	41.3	62.4	149	24
5	うもれ木	2.7	2.3	4.7	10.1	40.2	53.4	397	72
6	暁月夜	3.8	1.2	3.4	12.5	34.5	62.0	280	64
7	雪の日	2.6	1.0	2.1	7.4	19.1	46.0	54	9
8	琴の音	2.6	0.0	4.5	8.9	3.3	54.8	45	3
9	花ごもり	2.6	0.8	3.3	9.6	40.3	62.4	218	41
10	やみ夜	2.8	0.5	2.1	10.7	40.1	57.1	413	75
11	大つごもり	2.8	0.7	2.5	4.6	39.8	50.5	262	43
12	軒もる月	2.3	2.8	0.9	10.8	5.8	45.4	93	3
13	ゆく雲	2.5	0.8	1.6	9.0	24.4	56.4	145	17
14	うつせみ	2.4	3.0	4.3	2.1	45.2	50.0	233	63
15	にごりえ	2.6	0.5	6.8	3.3	66.4	44.0	732	220
16	十三夜	3.0	1.1	3.1	4.5	76.4	48.4	337	51
17	この子	5.4	1.9	1.9	8.9	4.4	60.4	101	9
18	わかれ道	2.2	0.0	4.3	4.7	73.7	49.8	254	77
19	裏紫	2.4	0.0	7.0	2.9	67.5	51.8	70	16
20	われから	2.9	2.7	4.1	5.0	38.9	52.8	521	134

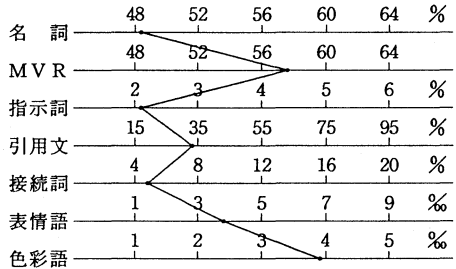
3. たま櫛



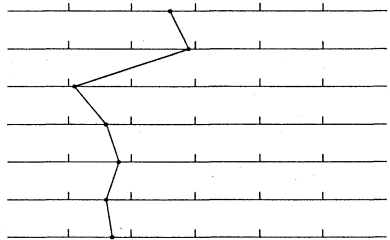
4. 経つくえ



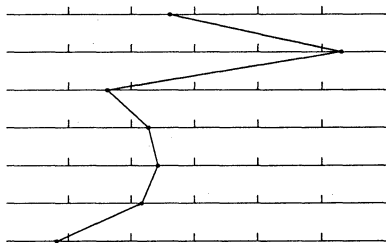
1. 闇櫻



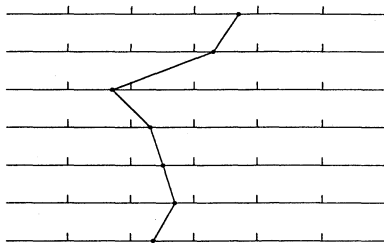
2. 別れ霜



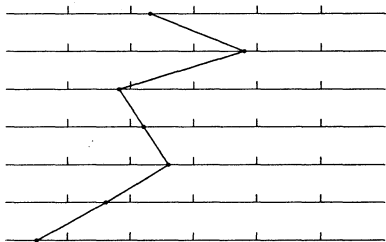
9. 花ごもり



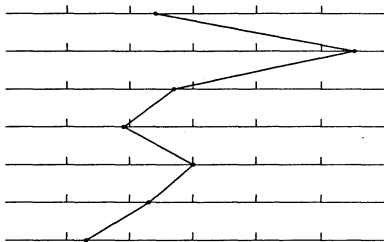
5. うもれ木



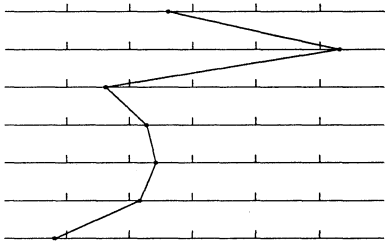
10. やみ夜



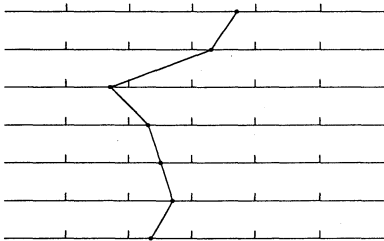
6. 暁月夜



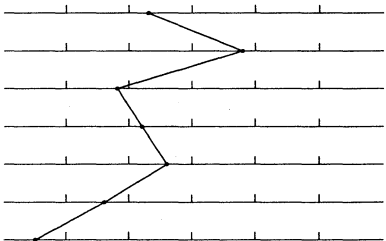
11. 大つごもり



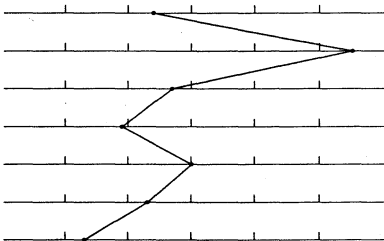
7. 雪の日

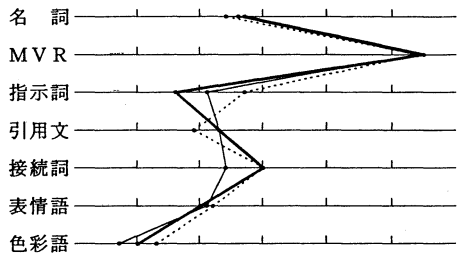


12. 軒もる月



8. 琴の音





- 4. 経つくえ
- ⋯ 6. 暁月夜
- - - 9. 花ごもり

二十のボタンを見
てみて、4『経つく
え』6『暁月夜』9
『花ごもり』の三つ
はよく似ているが、
そのほかはそれぞれ
いろいろなボタンで
あるとわかる。
ここで三作品から
例文をとりだしてみ
ることとする。

4 『経つくえ』

「思へば何故に彼の人のあの様に嫌やなりしかと長き袂
を打かへし打かへし見る途端、紅絹の八ツ口ころくと洩
れて燈下に耀やく黄金の指輪、學士が左の薬指に先のほど
まで光りしものなり。」

6 『暁月夜』

「白粉にはあるまじき色の白さ、衣類は何か見とむる間
もなければ、黒ちりめんの羽織にさらさらとせし高尚き姿、
もしやと敏われ知らず馳せ出せば、扱こそ引こむ彼の門内、
車の輪の何にふれてか、がたりと音して一ゆり揺れよば、

するり落かゝる後ろざしの金簪を、令嬢は緞手に受けとめ
給ふ途端、夕風さつと其袂を吹きあぐれば、翻がへる八つ
口ひらひらと洩れて散る物ありけり、」

9 『花ごもり』

「父さま似の色は白からねど、娘ざかりは山茶も出ばな
の色ふかく、派手ずきの母様が好みとありて、模様も花
やぎたる薄藤の中振袖、もれてぞにほふ八ツ口の緋ちりめ
ん、人目をうばふ織ものに、帯は繻珍か夏雄の彫りのぼち
んの金具は瀧に鯉、はつきりとせし氣象はとりなり活潑と
おもしろく、」

これら三作品に共通して言える事は、色や状態について
の描写が多く、従って強く視覚に訴える文章になっている
ということである。

ところで、二十作品についての各析項目の最大値・最小
値を次の図に示してみたが、それを見てみると最大値と最
小値の距離が大きいことがわかる。その距離が小さければ
その点が作者の文体の特徴をあらわすものとなり、また多
くの項目で最大・最小の距離が小さければその作者が確立
した文体をもっていると言えることになるのかもしれない
が、一葉の作品の分析ではそのような結果は出なかった。

したがって、ボタンを見る限りでは一葉は文体を確立し
ていたとは言えないようである。また、そのことを逆に言

	最小値				最大値				
名詞	48	52	56	60	64	%			
MVR	48	52	56	60	64	%			
指示詞	2	3	4	5	6	%			
引用文	15	35	55	75	95	%			
接続詞	4	8	12	16	20	%			
表情語	1	3	5	7	9	%			
色彩語	1	2	3	4	5	%			

▲20作品の最大値と最小値

うと、一葉の作品はどれも同じ様なストーリー展開であるにもかかわらず、実にさまざまな文体を用いて表現されているということになる。

五節 『たけくらべ』の色彩語について(省略)

今後はこうしたり残り残した分析を行っていくと同時に、さらに一葉の文体の特徴を明かにするために、一葉と同時に生きた作家の作品や女流文学作品についても分析する必要があると思う。

* 注 引用文中のルビは省略した。

〔参考文献〕

- 1 『樋口一葉全集(一)』 塩田良平・和田芳恵編 筑摩書房(昭49・3・20)
- 2 『文体の科学』 樺島忠夫・寿岳章子著 綜芸舎(昭40・6・25)
- 3 『文章心理学の新領域』 安本美典著 東京創元社(昭35・12・10)
- 4 『文章心理学の理論』 波多野 完 治著 大日本図書(昭41・9・10)
- 5 『論集日本語研究8 文章・文体』 山口仲美編 有精堂(昭54・4・20)
- 6 『新日本語講座7 作家と文体』 倉持保男・鈴木敬司編 沙文社(昭50・11・10)
- 7 『学研国語大辞典』 金田一春彦・池田弥三郎編 学習研究社(昭56・2・1)
- 8 『大辞林』 松村 明編 三省堂(昭63・11・3)
- 9 『国語学大辞典』 国語学会編 東京堂出版(昭55・9・30)
- 10 『樋口一葉——明治東京のフォークロア』 国文学 解釈と教材の研究29(13) (昭59・10月号)
- 11 『樋口一葉の生活の変化と文体の変化』 岡本 勲 中京大学文学部紀要19(1)
- 12 『文体としての句読点』 大類雅敏著 栄光出版社

三 結論

今回私は、品詞の比率、指示詞の比率、色彩語の比率、表情語の比率、接続詞をもつ文の比率、引用文の比率を手掛かりにして、樋口一葉の小説を分析してみた。しかし、これは一葉の文体を分析するための第一歩にすぎないと思う。

この他に文体の特徴をつかむための手掛かりとして、文末や文長の分析が考えられる。

また俗語や字音語などの語句、比喻などの表現にも注目すべきであろう。